

第7章 インタビュー調査結果

この章では、インタビュー調査に応じていただいた3名の指導者のインタビュー結果をまとめる。最初にご本人の現在の指導内容に関する情報をまとめた後、1) 指導上のポイント、2) 信頼関係を結ぶための工夫、3) チームワーク向上のための工夫、4) 「体罰」についての線引き、5) 「身体接触」についての線引き 6) 個室指導についての線引き 7) 選手との恋愛関係についての考え 8) 指導経験のなかでの成功例 9) 現在の指導観に影響を及ぼしたできごと 10) 自分自身が受けてきた指導 11) よいコーチングと、選手との適切な関係づくりとの間で感じる葛藤 12) スポーツ指導のための環境整備／条件整備に関して望むこと について伺い、各インタビューごとに総評を付した。

第1節 N氏（実施日時：2008年10月20日）

<基本的な指導内容に関する情報>

1) アンケート問1～問10まで、回答にそって確認

団塊世代の男性指導者。ご自身の競技歴はパワーリフティングで国際レベルの選手であった。50歳で競技を引退してからは指導に専任している。現在は、クラブを経営しながら、パワーリフティング、ウェイトトレーニング、ボディビルなど、様々な競技の基礎体力向上の筋力トレーニングを指導している。指導した選手は国際レベルの試合に出場している。

2) 指導料金（報酬）の有無と満足度

ご自身が会員制クラブのオーナーでもあり指導者でもある。指導は有料であるが、いくつかの点で不満である。パーソナル指導もしているが、東京と地方の格差および、日本におけるスポーツ指導者の位置づけや、社会的な評価が低いことに不満を感じている。

3) 指導環境

個人でクラブを設立し運営している限界がある。つまり指導している会員は、同時に指導料を頂いているお客様であるという現実があり、経済的にも経営面とリンクしているので、精神的にしんどいところがある。

<具体的質問内容>

1) スポーツ指導において最も大切にしているポイント

○双方の熱意と意欲。

「指導技術という、教えるためのテクニックとか、指導者が教える専門競技の知識というのも大事ですけど、やはり双方の熱意、意欲というか、つまりやる気をどうやって引き出すか、そういうことを一番に僕はポイントを置いています。」

2) 選手たちと信頼関係を結ぶための具体的な工夫

○会話を欠かさないこと。

「常に会話を欠かさないということですね。男性であれ女性であれ、要は話し合いをするというか、試合が終わったときはもちろん、試合の前も含めて、全てのことについての話し合いも、また次の試合の結果を、いい結果が出たときも悪い結果が出たときもひっくるめて、何て言うか、常に会話を欠かさないようにするということですね。」

3) チームワークを向上させるための具体的な工夫（チームスポーツの場合）

○過去、約10年間、県立高校サッカー部の競技力向上のための基本的体力づくりを担当してきた。チームワークの向上には、グループ内ディスカッションをいつも大切にしている。

「例えば短い時間で集中できるような種目の選定をする場合などは、どういう理由でこの種目をするのかという事を生徒達に理解させて、それを認識して貰って練習させています。つまりいろんなことをキャッチボールしながら、まあ、チームワークという意味合いでも、相互にディスカッションしていますね。」

4) 指導における「体罰」についての自分の線引き

○時を逃さず、その場で叱ることを原則にしている。同じことに関しては、日を変え、場面を変えて、3回は本人に注意するが、それ以上はしないという指導に、現在は変わってきている。一般的な場合でも暴力は振るわないという信念を持っている。これらは指導している相手が、お金を頂いているお客様であるという、クラブ経営上の会員さんである事とも関連している。

「けど、口では厳しく行きます。ええ。すべて、まあ、一応原則的には口で言います。そして生徒達との約束で、3回は言うぞと、口でね。3回以上は、もう、しかとするというか、言わへんと。だから、3回言うて、注意をしてくれんようになったら、君達もう終わりと思えよ。というような指導に変わってきましたね。現在では。」

「まあ、若いときは、それはもちろん、暴力は僕はほとんどしないんだけど、胸ぐらを掴んだり、それはもう、生意気盛りの生徒達ですからね。そういう点では大人のルールとか、世の中の常識的な事というのを、こと細かく言う訳じゃないんだけど、やっぱり非常に僕らも生徒達も、やっぱり親としてね。生意気盛りなときというのは、どうしてもそういうのがありますから、その程度の事はした事はあります。僕、けど、叩いたりということは、まずしないですね、僕は。そういうことはしませんね。はい。」

「性格的にも、口ではよく喋って、ガァーと言うんだけど、暴力はまず振るわないというのは、僕の生き方だし、もう信念ですね。」

5) 指導における「身体接触」についての自分の線引き

○一般的指導においては、種目動作を正確に指導するためと安全上のために、必要最小限の身体接

触はある。パワーリフティングの特殊性で言えば、セコンドとして、ギア*の着脱を行なう。そして競技用のギア(正式にはスーパースーツと言う)は、一般的には選手よりも10kgくらいは体重が重い人がサポートしないと、自在には着脱できないために女性選手であっても、通常は男性コーチが行なっている。3種目(スクワット、ベンチプレス、デッドリフト)ごとに3種類の異なるギアがあり、各種目においても、試技毎にそれぞれ重量を上げていくルール上、その都度にギアの着脱や、微調整作業が不可欠となる。その作業は力仕事以外の何物でもなくて、もはや選手の身体に触れずには不可能である。しかし、試合会場はまさに戦場と同じで、常に殺気立っていてどのコーチ達も一対一で、ましてや個室等で、これ等の作業を行なうことは到底あり得ない。

また、自分が指導している会員が試合に出る時は、コーチはすべて手弁当で試合会場まで行く。指導報酬やセコンド料金を貰うわけではない。

「この身体接触というのは、例えば、僕は腹筋したり、ハイパーバックエクステンションをするときには、相手のかかとを持ったりとか、ヒップや骨盤部分を押さえたりという、それはもうごく通常のなことですね。これは確かにやっていますね、それは。」

「けど、それはもう、その運動動作をより正確かつ安全に行う為であって、まあ、その動作を正確に覚えて貰って、きちんとこなすという事における必要最小限度の身体接触というか、もう限界でしょうね。ここまであたりが。」

「まあ、パワーリフティングの試合の現場では、女子選手の場合で言えば、その、下着をはいて、で、スポーツブラつけますね。ほんで、この上にTシャツ着てますよね。これ、Tシャツはこういうふうに着た状態で。だけど、パワーの試合のルールではこのTシャツの上に、さらにこのスーパースーツというギアを、着用させないといかんもんですから、それがもうかなり、あの、選手一人に着せるのに、2人くらいは人手がかかるんですよ。」

「その時に、結局、選手の身体に一切もう触らんというのは、確かにあり得ない事だし、それはもう試合そのものを放棄する事にもなるので、けどもちろん1対1で、ましてや個室で着せる訳じゃないですからね。」

*ギア (ウィキペディア) : レベルが高い選手は、ほぼ全員が「ギア」を着用している。「ギア」とは、スーパースーツとベンチシャツ、及びニーラップがあり、これらは体の各部分の保護(スーパースーツ=大腿部、腰背部、ベンチシャツ=大胸筋、肩周囲、デッドリフトスーツ=体幹部全体、ニーラップ=膝)のためとされているが、実際にはきつく縫い縮めたりして堅い生地 of 反発力を生かして記録を上げるための道具となっている。(2009年4月21日アクセス)

6) 選手を個室に呼んでの指導についての自分の線引き

○女子選手に対しては行なわない。

「男子選手の場合は1対1で、例えばこの事務所に呼んで注意をしたり、質問や疑問に応答するこ

とはやります。けど、女子選手の場合は原則的には、事務所内での1対1ではやりません。」

7) 指導者と選手の恋愛関係についての自分の考え

○指導場面ではきちんと線引きをするべきである。たとえ、そのような感情を持ったとしても表面に出すべきではない。しかし、先生と生徒の場合などは、その後卒業をしてから恋愛に発展することまで禁じることはできないと考える。

「だから、そういう面に関しては、ことさら勧めることでもないし。けど逆に、人間として絶対にあってはいかんと、決めつける事もおかしいと思います。けど、例えば指導しとる過程の中で恋愛関係になって、それを大っぴらにして、ほかの女子生徒も学生も指導しとるというのは、やっぱりそれはきちんと線を引いて、そここのところに恋愛感情を持ち込んでというのは、僕はいかんとしますよ、それはやっぱり。」

8) これまでの指導経験のなかでの成功例について

○N氏が40歳（現役選手で、日本チャンピオン当時）の年に、専属トレーナーとして、筋トレの指導をした、K選手（26歳）が極真空手の全日本チャンピオンになった。また翌年も全日本で3位になった。このときの指導は、N氏自身が実際に自分が「してみせて、言って聞かせて、させてみて、褒めてやらねば人は動かじ」という山本五十六元帥の考え方に多大の影響を受けていた。

○N氏が56歳（50歳で引退し、56歳で左ひざ半月板全摘出手術を受けた）のときに入門して来たT選手は、柔道四国チャンピオン4連覇を果たした（2009年4月現在）。60歳近くなった近頃では、英国の教育学者のウィリアム・アーサー・ワードの言葉に出会って、眼から鱗が落ちるほどの衝撃を受けた。

「凡庸な教師はただしゃべるだけ。ちょっとましな教師は理解させようと努める。で、3番目に、優れた教師というのは自らやってみせる。で、最後に、しかし本当に優れた教師というのは自分では何もせんと、いわゆる相手の心に火をつける。まあ、いわゆるモチベーションというか、意欲を持たせると。」

9) 現在の指導観に最も影響を及ぼした出来事について

○上記8)に記載

10) あなた自身が受けて来た指導はどのようなものだったか

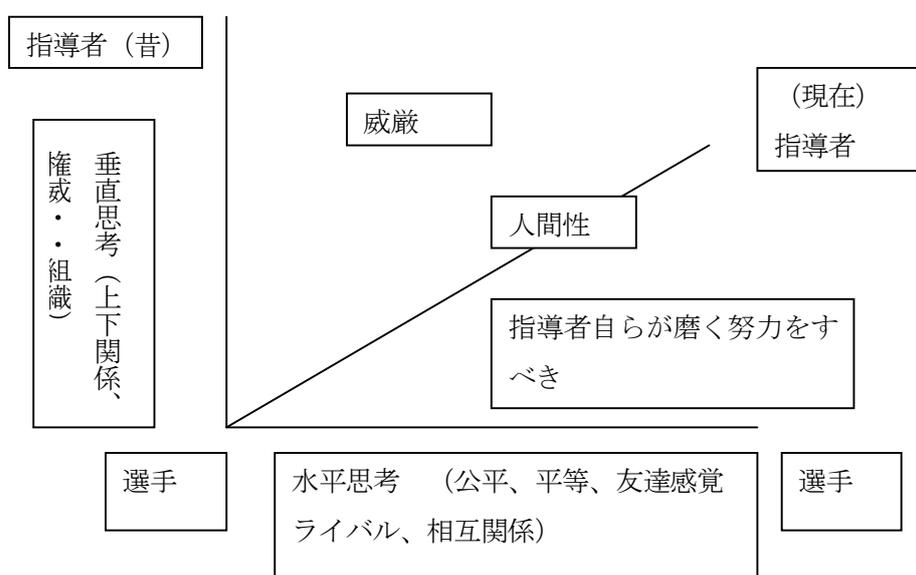
○独学独習で、8)のような指導に行き着いた。

「だから、もう大学の4年のときに、大学に同好会をつくったのが出発点ですから、まあ、一切誰にもと言うことはないけども、特別の先生について指導を受けたという事はないですね。だから、いわゆる向こうの、アメリカの、まあ、本を取り寄せたりとか、そういう事とか、まあ、国内でもいわゆるこの競技が、僕等がちょうどパワーリフティングに入ったときというのは、日本でパワーが始ま

ってまだ 4、5 年目ぐらいでしたからね。まあ、創成期の中では若い方でしたからね。だから、ほとんど独学独習ですよ。

まあ、直接は関係ないですけど、その当時の早稲田大学の、まあ言うたら日本の筋トレのパイオニアと言われる K 先生とかね。K 先生はウエートリフティングが御専門ですけど、K 先生にはいろいろと、トレーニングのベーシックというような事を教えて頂いたりとか、というのは有りましたけどね。まあ、いわゆる特定の先生からのコーチングというのも全然、受けた事はないですね、僕は。ほぼ全て自分の独習独学ですね。」

11) よい指導（コーチング）と、選手との適切な関係づくりとの間で感じる葛藤



○図のように、昔の指導者と選手は上下関係が強くて垂直思考である。それに対し、選手同士は水平思考で互いに良きライバルとなっている。指導者と選手が、完全なる水平思考の相互関係になるのは余り良くなくて、やはり斜めの軸の方向を目指していかなくてはならない。専門競技の知識を学ぶことも重要だけれど、人間性をも同時に磨き合い、指導者と選手双方が心の扉を開いてキャッチボールができるような、人間関係を構築する必要があると考えている。

12) スポーツ指導のための環境整備／条件整備に関して望むこと

（指導料金、アシスタントコーチ、トレーナー、保護者や地域との関係作り、指導法などに関する研修会、他の指導者との交流、統括組織などについて）

○日本におけるスポーツ指導者の社会的評価が非常に低い事が大問題だと思う。

「指導者に対してもね、いい選手を養成し、良い結果を出したら、回りから施しを受けないと生活が成り立たないような、経済事情では誰も指導者などは目指さないの、立派な結果を出した指導者にも、選手同様に国が生活や身分を担保してやるような総括的なシステムを創り上げないと、今後は良い選手も良い指導者も、ともに生まれてこないですよ。」

○指導者は体育・スポーツに関する知識だけでなく、オールラウンドな知識が必要である。

「われわれトレーナーを職にしている人間にも自覚が足らん。それと、それに対する勉強がね。いわゆる、その専門のトレーナー学とか体育学だけじゃなしに、もっと人間学というか、哲学から人生までをひっくるめて、そういう人間の心の奥底までをトータルに学ぶような、謙虚な姿勢と言うたらおこがましいですけど、やっぱりスポーツ以外にも眼を向けるというか。新聞読んでもスポーツ欄以外の政治、経済や文化面にも、ある程度精通したようなオールラウンダーな人間教育がいると思っています。」

○体育スポーツ界だけでなく、まだまだ日本全体が伝統的慣習や規範に縛られ過ぎている気配が濃厚である。そのような枠組みに納まらない人間（選手）は、組織外に流出している。考えればある意味で、特殊な人材の流出で残念な事でもある。例えば、野茂、イチロー、石井慧など。

「石井慧という柔道の選手が何か発言したら、『いらんこと言うな』と。もちろん彼の若気の至りでとんでもない事を言うとするんだけど、彼は非常に頭のいい、柔軟な発想ができる数少ない柔道選手なんだけど、いわゆる強い者が勝つんじゃなしに、ルールに順応して、その社会に適応できて、勝ち残った人間が強いんだというようなことを言うてますけど、それはなかなか彼は、若いのに凄い柔軟な発想してますよ。」

「まあ、俗に言う男のくせにとか女のくせにとかいうような、男らしさとか女らしさというのは、ことさら表に出して、それでそのなかで、こうあらねばいかんというようなことを決め付けたような風潮で、話す人が結構いるじゃないですか。でもちょっと違うことを言うと、その人達からはもう異端分子となって、そういう価値観や人生観等が違う人達とも、必要最小限のルールを互いに守り合っ、て、共存共生したり、ともに助け合ったり、ともに発言したりを少しでもして行ける土壌や風土を作って行かないとね。そうしないと日本のスポーツは完全に世界から取り残されると思うよ。まあ、だいぶん良くなっはきてるんだけどね。」

総評

N氏は、大学が法学部と、体育・スポーツ系でなかった事もあり、独学独習で国際レベルの選手にまでなられた。その過程で、体育学だけでなく、人間学を学ばれたように見受ける。また、ご自身がクラブを経営されていることもあり、マネジメントに必要な世間一般の常識に関してもセンシティブであられる。国際レベルの競技経験があり、指導者としても国際レベルの選手を輩出されているが、体育・スポーツの世界だけに浸っておられない。このように、世の中全般を見渡せる俯瞰的視野を持つことが、体育・スポーツにありがちな体罰やセクシュアルハラスメントのような倫理的問題から距離を置き、これらを客観的に見定める能力を備えることに必要なのであろう。

体育・スポーツは、その特殊性から指導上、安全上、指導者と選手の間においても必要最小限の身体接触はあるという意見をお持ちだが、これらへの対応、線引きについても確固とした理念を持たれている。

第2節 K氏（実施日時：2008年10月14日）

<基本的な指導内容に関する情報>

1) アンケート問1～問10まで、回答にそって確認

団塊世代の男性指導者。主たる競技歴はバスケットボール。高校の頃から強豪校の選手として活躍。高校卒業後は実業団のバスケットボールチームのメンバーとして実業団選手権で活躍、24歳で引退後は、28歳から31歳までプライベートリーグでアメリカンフットボールでも活躍。他にバレーボールもやっていた時期がある。36歳から中学校でのバスケットボールの指導に関わる。現在は総合型地域スポーツクラブを主催し、県のバスケットボール指導者協議会会長。日本体育協会バスケットボール指導者、スポーツプログラマー、日本体育施設協会トレーニング指導士など多数の資格を持ち、県や日体協の講習会や研修会での講師歴多数。現在は中学校の女子チームと総合型の小学生男女チームを指導している。高校生時に母校の中学校の後輩を指導して県大会優勝、最近では中学女子チームが県ベスト16。

2) 指導料金（報酬）の有無と満足度

自身は総合型地域スポーツクラブを主催しているが、指導料はない。中学校の指導もボランティアで無報酬。

3) 指導環境

総合型地域スポーツクラブでは学校開放の体育館で低学年の子どもでも「できる」ことを中心にチームを運営。中学校では学校の体育館で顧問の女性の保健体育教員（専門は器械体操）と連絡を密に取りながら、選手を指導している。総合型では練習場所の確保に困難を感じており、中学校では中学校の規則を尊重しながら一からのチーム作りに腐心している。

<具体的質問内容>

1) スポーツ指導において最も大切にしているポイント

- 選手個人を尊重する。「誉めて」伸ばす。

「具体的にはどう尊重しているかというのは、ほとんど指導をしないというか、本人がやれるようになって、できたら褒めるという、そんなかたちでしょうか。待ちの時間がすごく長くて、今の2年生に関しては待っている状態です。」

2) 選手たちと信頼関係を結ぶための具体的な工夫

- まずは名前を覚えること。

「上級生の引退の日の記念写真を参考に、顧問の先生に正式な名前とニックネームとを聞きながら、3日間くらいをおぼえるための時間をつくる」

○ ひとりひとりの良いところを見つける。

「とにかく一人一人、おまえはこれが一番だというのを見つけるんですよ。それをみんなの前で言うの。練習中にね。」

3) チームワークを向上させるための具体的な工夫（チームスポーツの場合）

○ 選手同士が決めたことを応援する。

「私自身の考えは、試合って選手がやるものだし、比較的バスケはコートサイドで声を出してってできるんですけど、やらないようにしているんです。応援団に徹する。だから、いろんなことを考えて、自分たちで出した結論なら、自分たちで頑張れるでしょうというやり方ですね。」

「試合の前にミーティングをやって、試合に臨んでこうしようって確認は必要ないけど、みんながやりたいっていうなら、ちょっと時間をかけて話し合いをして、こんなことやろうって決めて、それをやったらどうってくらいです。」

4) 指導における「体罰」についての自分の線引き

○ 体罰は絶対にだめ。しない。言葉の暴力も同様である。試合の場面で他の指導者が暴言を吐いているときは、「会長」であることを相手に伝えて暴言を吐かないように指導者を指導している。

「試合中だから、ついつい熱くなっちゃうんだろうけど、ばかとか、あほうとか生徒に言う先生がいるんで、とにかく聞いていて。怒るベンチ、何て言うのだから、ほんとうにばかとか。だから私は、虎の威を借るじゃないけど、会長ですよって。そういう人にはわざと、名刺持って行って、試合の前にちゃんと渡しとくの、そういう人は、あらかじめわかるので。だいたい効きますよ。」

「あいつ来たから黙っとこうになればいいんだけど。市の大会なんかでも、全国に出るような監督はもう声出さない、試合になっては。ほんとうに訓練されて強いチームっていうのは、ベンチのなかではお茶を飲んでいるというような感じで、静かで。」

5) 指導における「身体接触」についての自分の線引き

○ 身体接触に関しては特に細心の注意を払っている。それは以前ストレッチの指導に絡んで、「女性の上に乗った」とみていた者に解釈されてコーチをやめざるをえなかった経験がある。身体接触を伴う指導場面では男子生徒を使って見本を示している。

「女性だとね、身体触ったことないですよ。」

「(触ると) 大変ですよ。以前行っていた中学校では、首になりましたからね、ストレッチを指導して。足の裏を伸ばすのに、寝転がってやるでしょう、けがしないように、ちゃんと体重を上からかけるようになって、子どもがやると、こんなことやっているから、「違う違う、こうだよ」ってやったら、女性の上に乗ったって言われた。それは反論する気にもならないんだけど、ただ、やった子はそんなに嫌がってないと思うけど、見ている人。あとからわかったんだけど、試合に出られないというひがみもあったらしいんです。」

「そういうことも経験しているから、いまのチームではできるだけ触らず、もしやるのであれば、男の子がけっこう隣で練習しているんで、「おい」と呼んで、「ちょっとおまえ、思いっきりここに当たってみろ」、「こう止めてくれ」ってやるんですよ。女性だとできないからね。」

6) 選手を個室に呼んでの指導についての自分の線引き

○ 女子選手に対しては行かない。

「学校の中にも相談室があって、ミーティングやるときに場所がないって言って、相談室で、やっぱりそこで一人で待っているときに生徒が入ってきたんで、ちょっと待って、俺考えごとをしているからって、一人で来た子は入れないようにしている。だって、俺が一人で中に入っていて、こういうガラス張りならまだいいんだけど、学校の部屋というのは何にも見えなくなっちゃって。」

「だって出てくるとき、二人で出てきて、そこだけ見られたら。何やってんのってなっちゃうから。」

「うちの(総合型地域)クラブの指導者も、みんな男ばかりなので、考えているのは、まず話するときは二人きりにならないようにしよう、最初から言っているの。」

例えば、どうしても子どもが一人で、女性で、といったら、ほかの指導者呼んできて、必ず複数で話を聞きましょう。相手が嫌だって言うなら、隣にいてもらって、黙っているだけとかね。」

「難しいのは、個室なんかなくていいんだけど、これからの時期って、夜がすごく暗くなるの早いので、いま行っている中学校だと、体育館と校舎のあいだにちょっと屋根があって、そこで終りのあいさつをして、さいならなんだけど、帰らない子がいる。早く帰れて、その場面で二人きりになりたくないんですよ。先生はすごく忙しいから、あいさつすると、すぐ職員室行っちゃうんですよ。もうみんな帰ったなと思ったら、残っていたっていうときがやばいです。」

7) 指導者と選手の恋愛関係についての自分の考え

○ 自分自身はそのような場面に遭遇してこなかったし、男性コーチと女子選手との恋愛関係が個人的には嫌なのかもしれない。

「恋愛するんなら、そういう立場じゃなくて、1対1でやれよっていうね。多分ね、指導者とアスリートって関係になっちゃうと、多分、一所懸命強くなりたいと思っている子は、言うこと聞いちゃうからいけないんだよね。そういうときに、それを利用してというのは、よくないかと、指導者の立場では。(県の)会長の立場としてはどうでしょうか。禁止令かな。」

8) これまでの指導経験のなかでの成功例について

○ 選手本人が気付いてできるようになったことを褒めることで、選手がどんどん伸びていくことがある。あえて指導しないで、選手の気づきや成長を待ち、それを見逃さずに言葉で表現することが大切である。

「やっぱり、うまくいったなというのは、ほんとうに自分では、何て言うんですか、教えない、だから、保護者の方から見ると、あの人は何もやらないって言われちゃうんだけど、それで、この子ど

もたち、選手の、自分の持っている能力に目覚めてっていうのかな、いろんなことができるようになったとき。それをそっと褒めてあげて、本人がその気になって、ばんばんやりだしたときとかね。それはもう自分のものになったわけでしょ。「すごいね、ほかの人にも教えてよ」って言えるようになったときというのはいいですね。」

9) 現在の指導観に最も影響を及ぼした出来事について

○ 中学校時代のバスケットボールのボランティアコーチのきつい教え方が反面教師としてのモデル、高校時代の先生は短時間で厳しい指導であったが良いモデルとなっている。

「金子みすゞさんの詩とかね、そういう、人というよりも、そういうのに、コーチングに、みんな違って、みんないいっていうのが、コーチってそうだよなって思い出す方法を持っている感じはしますね。」

10) あなた自身が受けてきた指導はどのようなものだったか

9)のように厳しい指導を受けてきた。

「時間は短いけど厳しい。ちょうど国体で予選でもう出られなくなっちゃって、隣の学校が女子代表で出るようになって、そうすると女子も優勝を狙っていたから、女子は2位になったんですよ。それもエースが故障しちゃって2位だから、ほんとうは実力があつたと思うけど、その練習に付き合いられました、ずっと。で、たいへんなんですよ、女子の練習って。夜が明けるまでやって、男子はついていけない。途中でみんな動けなくなって、うええとなっているのに、ちょっと休憩したら、また「はあい」と出てきて頑張って、もうこっちはだめだよ。そのときわかったのは、女性ってすごいな。最近になってわかったのは、ちゃんと手を抜けるんですって、女性は。男の子はほんとうにぶっ倒れちゃうんですよ。うちらは付き合い合っていて倒れた子は何人もいるから。女子が頑張っているのって、最初は思ったんです。違うの、彼女たちはちゃんと抜くところは抜いている。うちらは先生に言われて、こういう役目だから、ここ絶対やってねって、それを一所懸命やっちゃうんですよ。それで動けなくなっちゃう。」

11) よい指導（コーチング）と、選手との適切な関係づくりとの間で感じる葛藤

○ 指導対象が女子中学生ということもあり、クラブ活動そのものを一から指導していく大変さは感じている。

「難しい。もう毎回毎回なんか。これでもね、けっこういろんな中学校行って、いろんな男子も見だし、高校チームも見たことあるんですよ。高校なんかだと、そこそこ学校の生い立ちなり何なり、歴史みたいなのがあって、クラブ活動ってしっかりしているんですよ。だから、ほんとうに行くだけでよかった。中学校はだめ。その土台から何から考えてやらないといけないし。ある中学校は、バスケット部がないのをつくるまでやりましたからね。これはすごくたいへんだったですよ。自分ではできるだけ、前面に出ないようにして。」

12) スポーツ指導のための環境整備／条件整備に関して望むこと

(指導料金、アシスタントコーチ、トレーナー、保護者や地域との関係作り、指導法などに関する研修会、他の指導者との交流、統括組織などについて)

○ 総合型スポーツクラブに関しては、スポーツ施設を確保することが困難である。また、コーチに相応の謝金が払えていないのが現状で改善したいと考えている。

「学校とか企業で体育館を持っているところはできるんですけど、そうでなくて運動したい人っていないので、総合型のクラブなどが使えるようになっていう面では、学校開放って、制度的にはやっているんですけど、なかなか使えない。開放しているところは、それぞれ団体があって、月曜から日曜日まで時間帯びっしり入っていて、空いているところがないんです。」

「(コーチの報酬に関しては) みんな言っています。うちも決めたんですけど、払えないんで。うちも会費しか収入源がないんで、払えないんですけど、でもうこれから、指導者にもちゃんと謝金が払えるようにしないと、クラブにした意味もない」

総評

K氏は、上場企業の専門職として仕事をしており、実業団選手だった経歴を活かして学校や総合型地域スポーツクラブで青少年を指導するかたわら、県協会で、会長として指導者育成にも携わっている。様々な経験をふまえて選手の自主的な行動を待ち、成長の場面を見逃さずに褒め、また次の成長場面に選手を引き上げていくという教育的な立場でバスケットボールの指導や指導者育成に力を注いでいる。柔軟な考え方で、競技に限らず「楽しみ」のスポーツをする場を提供し、バスケットボールに限らずポールウォーキングの指導やスポーツイベントも主催していて、活動の場も、県、学校、総合型地域スポーツクラブと幅広い。

女性の指導に関しては、中学生だからこそ最新の注意を払う必要があると考えており、それを指導場面で実践している。また、女性指導者の活躍によって県のバスケットボールが盛んであるとの認識を持っており、女性指導者に期待し、感謝している。

N氏のように、社会人、一市民として確固たる信念にもとづいて、常識的にスポーツに携わっている人材であることが、また、そのような人材が次の世代をリードしていくことが、スポーツの場面の暴力やセクシュアルハラスメントを抑止していくことには欠かせないと感じさせられた。

第3節 I氏(実施日時:2008年10月29日)

<基本的な指導内容に関する情報>

1) アンケート問1～問10まで回答に沿って確認

ご自身は中学生で剣道、高校で山岳、大学でバスケット、社会人になってラグビーをやった。指導者としても野球とミニバスの指導をしてきた。

2) 指導料金(報酬)の有無と満足度

完全なボランティア。それがアマチュアだと感じており、仕事に影響がない限りはそれでいいのかなと考えている。

3) 指導環境

現在は地域のアイスホッケークラブにて、小学生1年生から6年生までの男女を指導。

<具体的質問内容>

1) スポーツ指導において最も大切にしているポイント

- 絶対にしてほしくないことは言わない、えこひいきをしない。

「絶対にしてほしくないことは言わない。例えば練習でだらだらやっているときに『そんなに練習しないのなら、練習に来なくてもいい』とか『もうやめちまえ』とかっていう、ときどき怒ったコーチとか、こうしゃべりますよね。まともにそれを受けられると困るので、絶対にやってほしくないことは口に出さないというのは、信条として僕は思っています。」

「特に女の子ですけども、嫌われちゃうと、それこそ『あのコーチ、目つきが悪い』とかね。要するに、もうどうしようもないイメージに行っちゃうんで、絶対に身体を触らないとかね、いうかたちの気持ちではやっていますよね。それからあとは、えこひいき。あれはもう確実に見破られるという感じが、ひしひしと感じますから。えこひいきもね、かわいいからどうのこうのっていうんじゃなくて、うまいから少し上のレベルのパスを出すとか、そういうかたちになったときに、『どうして私だけそんなパスなの』という感じがありますから。だから、うまくそのへんが取れるからそういうパスなんだよと説明しながら。」

2) 選手たちと信頼関係を結ぶための具体的な工夫

- 同じ回数だけ練習させる、こちらから触れない。

「練習をするときに順番を変えない。要するに、並んでやったときには、必ずスタートをして、終わる人はその人の前で終わるというかたちで、1周なら1周、必ずやるようなかたちでは気をつけていますけど。ですから、もうやってもしようがないからどうのこうのとか言いながら、下手の部類のところまで行く前にやめてしまうとかいうことはないです。必ず最後まで、同じ回数だけやらせるようなかたちは取っています。」

「特に女子ですけども、ミニバスなんかのときに、試合開始前に、こう、ハイタッチをしたりするんですが、必ず、私が下に出して、相手がタッチをするんだという状態。こっちが無理やり、頭を撫でたりとか、肩をたたいたりとか、何とかじゃなくて、向こう、こうやって出して、順番にやっていくというパターンを気をつけていましたけどね。向こうがやりたくなければやらなくてもいいという状態、まあ、やらない子はいないんですけど、タッチするのに、そういう気持ちではいましてけどね。要は、こっちから触るといことは絶対にしない。」

3) チームワークを向上させるための具体的な工夫

- どんなに下手でもプレーさせる。

「チームというのは、メンバーがそろわないと試合にならない。だから、どんなに下手なやつでも、やらせてやれという気持ちは言っていますけどね。野球だって一人じゃ勝てない。どんなに下手でも電信柱が立っているよりはいいなと。あははは。本人の前では言いませんけどね。そういう、例え用としてね、そういうふうなかたちで言いますけどね。」

4) 指導における「体罰」についての自分の線引き

- 絶対にあってはならない、先に見える練習をする。

「手をあげたことは一切ないですね。大きな声は出したことはあります。ですから、声までですかね。でも、それも大きい声は出しているけども、絶対にキレていないという感覚を持ちながらやっているつもりですけどね。まわりの指導者は、言葉の暴力と言うんですかね、『やる気あるのかよ』というところからはじまって、そういう感じのチームは見ることがありますね。もう、ほんと、しゅんとして、ただ聞いているだけっていう。あんなチーム、あそこまでして。もっと楽しくやりたいなという感じはありますよね。僕はね、スポーツの場面で、状況はいろいろあると思うんですけども、暴力というのを持ち出すのは絶対にあってはならない気持ちでいますね。ちょうど私が山岳部に入ったころですかね。若いからご存じないかもしれませんが、東京農大のワンダーフォーゲル部が、しごきっていう、あそこからはじまったような話がニュースに出たりして、ああ、よくないんだなという印象がすごいあるんですね。そういうふうな気持ちではいますけどね。」

「まして、お尻をたたくと言っても、あれじゃないですか。女の子のお尻をたたいたら、それこそおかしなことになりますから。もうビンタもしないし、もし間違っって耳にでも当たったらというような感じもありますし、そういうことはないですね。」

「もちろん、何て言うんですかね、腕立て 10 回とかね、ランニングしろとかっていうのも僕はあまりしないタイプなんだけど。試合に負けた罰としてだったら、練習のときにもう、必ず先に見える練習と言うんですかね。いつまで走らされるかわからないっていう状態じゃなくて、3周なら3周走れとかたちのやり方でやっていますので、やっぱり、こう、先が見えないと、やりたくもないだろうなという気持ちがあるので、そういう気持ちではいるんですけどね。」

5) 指導における「身体接触」についての自分の線引き

- 痛いところを確認するために触れたりアイシングはするが、マッサージはしない。テーピングをしてまでプレーさせない。

「例えば、ねんぎに近いかたちになったときに、どこが痛いかっていうかたちで触ることと、アイシングはしますけど、マッサージとかっていうかたちではしないですね。実際に、ほんとうにどこが痛いのか。要するに、それだけ痛がるなら、やっぱり医者についていう気持ちのうえでの内容ですかね。まあ、かなり、自分で判断できるようになれば、テーピングしてスポーツしていかどうかという判

断をさせるんですけど、小学生には、もうその段階では絶対に、テーピングしてどうのこうのという段階では、もうさせないですね。」

「大学の野球なんかだと、先輩のマッサージを後輩がするとかってことを言っていますよね。あ、そういうのもいいのかなと思うんですけど、要はマッサージの資格がないのに、ほんとうにいいのかなという感じはしますけどね。」

6) 選手を個室に呼んでの指導についての自分の線引き

質問省略。

7) 指導者と選手の恋愛関係についての自分の考え

○ チーム内恋愛はなし。恋愛感情はもたないようにする。そうでないと他の選手が我慢することになると思う。

「自分の場合は年齢差がありますから、そんなことはないですけども、ただ基本的には、チーム内恋愛はなしじゃないのという気持ちではいますけどね。選手間ですね。でも私が全日本のバレーボールの女子のコーチをやっていたとして、恋愛感情は、極端なことを言えば、持たないようにしますね。どんなにすてきな人がいても、そういう気持ち。私が独身であっても、そういうふうには、私自身は思いますね。」

「例えばチームがあって、コーチがいて、一人の女性を好きになって、まあ、結婚まで行くとしますよね。そうするとき、ほかの選手は、やっぱりなと思うのと同時に、やっぱりそのチームにいるから、例えばオリンピックに出られるとか、国体に出られるとかというので我慢しているかということですよ。もしほかにそういうチームがあるんだったら、そっちへ移っちゃうんじゃないのかな、という気持ちのほうが正直なんじゃないかなという気はしますよね。一人だけに恋愛感情を持ったコーチでいいのかなというふうには思いますけど。」

8) これまでの指導経験の中での成功例について

特になし。

9) 現在の指導観に最も影響を及ぼした出来事について

特になし。

10) あなた自身が受けてきた指導はどのようなものだったか

○ やりたい人が集まっている中で、強制ではなく、楽しそうに教えてくれた。

「山梨県って自治会対抗の体育祭があるんですけど、そこで7人制のラグビーをやるんですね。その『ラグビーチームをつくってほしい』と言われて、その指導はしたことがあるんですけど。その手本になったのが、昔、早稲田の連覇会という2連覇したチームがあるんですね。その人たちがわれわ

れに教えるときに、ほんとうに楽しそうに教えてくれるんで、そういう雰囲気とかね。

例えばランパスで行きますよね。で、帰ってくると、疲れたらここで休んでいても文句を言わない。次、行って戻ってきて、ここで入って、また入るといような、そういうふうなやり方が非常にいいなど。やりたくなければやらなくてもいいんだけど、やっぱり、やりたい人が集っているから、というかたちでしたけどね。」

11) 良い指導（コーチング）と、選手との適切な関係づくりとの間で感じている葛藤

○ 「スポーツには気合いと根性」というつもりはないが、子ども（選手）にはもっと気合いと根性を持って欲しい。そうしたことを親が子どもに言わない。

「アイスホッケーというのは、防具とか、かなり大きな荷物になるので、親が運んで来てやらなきゃいけないんですね。ですから、送り迎えがあるんですよ。試合中とか、その練習も親が見ていたり、あるいは親と一緒にスケートだけやったりするんですけども、親が子どもを怒らないんですよ。もっとやる気を出せというかたちのことを、親のほうが言ってくれてもいいのかなど。だらだらしてんじゃねえっていう感じのを、もっと言ってほしいなという気持ちは持っていますけどね。ああ、優しく育てているんだなって感じのところがあるので。私は、まあ、言葉のあやとして、スポーツには気合いと根性だっという指導、言い方をしていますけど、実際には、そういうつもりもないんですけど、やっぱりそういう根底を少しは持っていていいのかなという気持ちで、そういうふうには言っていますけどね。

12) スポーツ指導のための環境整備／条件整備に関して望むこと

○ アイスホッケーなのでリンクの使用料がかかるが、それなりの負担になる。各チームに公平になるような工夫をしてほしい。

「アイスホッケーでは連盟が試合を設定するわけですよ。試合の参加費というのが、こう、何万円って来るわけで、リンクの使用額何かとか、チームの多いところは個人負担が少ないんですよ。人数が少ないところは、やっぱりそれなりの負担になるわけですよ。今は1チームいくらっていうかたちになっているんで。頭割りでどうなんですかって、僕言ったことあるんですけどね。やっぱりこう、チーム努力でメンバーを増やしてくださいということになるんで、そのへんが。」

番外) 理想的な指導者像

○ 勝利を目指すことが大前提。年齢とかには関係なく、知識を持っている人から教われる人。

「まず、目的は勝利であること。その勝利に対して、条件をつけて、全員が出て勝利するとかね、いうふうなかたちで、やっぱり、楽しくやろうよっていうんじゃなくて、やっぱり勝利、勝ちを目的にしないと、やっぱり真剣味が出ないんで、絶対にだめだというふうに思いますね。

それとあとは、年齢に関係なく、知っている人が知らない人に教える。俺もアイスホッケーをやっていて、6年前に始めて、全然知らないところからはじまりますよね。そうすると、若い人から『池

田さん、こうなんですよ』って教えられるじゃないですか。そのまわりの人が『池田さん、そんな若造に言われて、よく腹立ちませんね』って言われるけども、それはべつに、知っている人が知らない人を教えるというのは当然のことだという感じだと思いますけどね。

私、コンピューター関係の修理の仕事をしているんですけど、この世界も、若い人が来て、いくら先輩の社員であろうと、教えることは教えるというパターンですから。」

総評

I氏は、これまでに数多くのスポーツ種目を実施し指導してきた経験を持つ。またコンピュータ関係の仕事に従事しているためか、新しい知識を身につけることに対してとても柔軟性があるように感じた。スポーツの指導としては地域レベルで子ども達に教える活動が主であるが、体罰やハラスメントについてしっかりとした意識を持っており、それ故に、ご自身がそうした問題に関わったり悩んだりした経験の話などは聞けなかった。同時に、まわりの指導者の言動には「無頓着すぎる」という指摘をされていた。おそらく、数多くいる地域レベルの指導者の中でも、今回のテーマとなった倫理問題に関しては高い意識を持っている方だと想像する。そうした意識は、もしかしたら上述のような多様なスポーツ経験や、日常生活における仕事とスポーツ指導とのバランスからつくられたのかもしれない。このような方の存在や考えを、「トップレベルの指導者ではない」ということで軽視してはならないと強く考える。